

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-22

法政大学史学会々報(8号)

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

103

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

1956-03

法政大学史学会々報

昭和三十年三月七日

卒業論文要旨発表及び指導会 午後六時より於七〇番教室

午後十時終了

藤井・竹内・丸山・河原各教授、芥川助手、大学院・学部学生約四十名参加。

三月二十九日

新制第五回卒業式挙行さる。卒業生一同より、「東洋護史地図」一冊寄贈を受く。

四月二十日

法政大学史学会例会 午後六時より、於四番教室。

例会に先だち、単位履修方法を中心としての、ガイダンスあり。

右終了後引き続き例会（新入生歓迎会）あり。

出席者 藤井、竹内、丸山各教授、芥川助手、在学生約五十名。

六月一日

法政大学史学会委員会 於研究室、春季史蹟調査及び総会に關する打合せ。

六月十三日

史蹟調査プリント編集、通知状作製、於研究室。

六月十六日

同右

六月十八日

昭和三十年度法政大学史学会総会及び講演会、午後六時より於七十番教室

事業報告、会計報告あり引き続き講演会

「トインビーの歴史観について」文学部長 谷川徹三教授

参加者 藤井、板沢、竹内、丸山各教授 芥川助手、他約一〇〇名

六月十九日

春季史蹟調査 「武蔵国分寺方面」

〔行程〕 国電国分寺駅―武蔵国分寺址〔資料見学〕―府中―大國魂神社〔拜殿内にて宝物拝観、屋敷〕―高安寺〔古文書解説、寺内見学、休憩〕―解散〔午後四時〕

参加者 藤井、板沢、竹内、丸山各教授 芥川助手、卒業生、在学生（大学院、学部）二十七名

六月二十三日

「法政史学」第七号発刊さる。

十月十三日

法政大学史学会委員会 於研究室

藤井、竹内、丸山、河原各教授、芥川助手
卒業生委員 桜井、安岡委員

在学生委員 新井、富取、那須、林、伊藤委員 出席

秋季史蹟調査、公会講演会その他について協議。特に月例会

(仮称) 実現に向つて努力する旨申し合せあり。

十一月十三日 秋季史蹟調査「東村山方面」

〔行程〕 西武線東村山駅—正福寺(国宝建造物地藏堂見学)—徳藏寺(国宝元弘三年の板碑見学・昼食)—將軍塚—荒畑富士—西武園駅(解散午後三時)

十一月十九日 第七回法政大学史学会公開講演会 午後五時半より 於学生ホール

漢民族の南支那発展について

教授 河原 正博

歐洲土産—蘭、英にある日本関係史料—

講師 岩生 成一

イスラム建築特にモスクの様式の変遷について(スライド使用) 教授 岩永 博

十二月五日 法政大学史学会第一回月例会 午後五時半より 於

八番教室、

昭和三十年年度卒業予定学生の卒業論文中間発表を主内容として実施

て実施

参加者 藤井、板沢、竹内、丸山各教授 大学院学部在學生三十二名

昭和三十一年二月二日 法政大学史学会第二回月例会

研究発表 院政々権について

大学院 酒巻正三郎君

昭和二十九年年度決算報告

収入の部

前年度くりこし金

一〇、五九二—

會計課

扱(主として学)

二八、一八六—

振替口座

扱(主として卒業)

四、〇二七—

現金

扱(卒業生納入会費及び寄附など)

四七、二四〇—

計

九〇、〇四五—

支出の部

諸行事費

二七、九三〇—

雑誌発行関係費

九八〇—

雑費

五、五二五—

30年度へくりこし

五五、六一〇—

計

九〇、〇四五—

本年度責任者 4年 新井

昭和廿九年度史学科卒業論文題目

山鹿素行論 —主として聖教要録をめぐる古学思想に就き— 伊藤 稔
幕藩体制の行詰りと三大改革 —特に天保改革を中心にして—

南北戦争に於ける奴隸制度の問題 江尻 寿明
江戸町人意識に関する一考察 風戸 三郎
—主として大通の意識と生態に就いて—

幕末に於ける尊皇攘夷思想の研究 川手 助雄
—特に水戸藩に於ける尊皇攘夷思想の本源について— 伊藤 須賀子

水戸藩尊攘運動に関する一考察 阪口 裕
—特に水戸藩尊攘運動の興隆と衰退の要因に關して— 泉 名 武

フランス革命の成し遂げたもの 田中 紀夫
明治初年に於ける北海道の開拓及び政策について

中世都市に関する一考察 (特にドイツ商業史と関係しつつ) 仲条 健治
明治維新に於ける武士階級解体の考察 鶴崎 和子

地租改正に関する一考察 —改正後における諸問題— 橋本 文男
仏革命に於ける議会の動き 長谷部 光生
明治初期に於ける殖産興業について

—明治政府の政策を中心にして— 藤原 誠治
正徳聘礼時に於ける王号復興問題に関する一考察 松尾 清己

近世村落構造と百姓一揆 —特に福島会津地方の場合— 水上 栄寿
イギリスに於ける一八三二年の選挙法改正に就て 矢口 五郎

宋代に於ける絶対君主制成立についての一考察 吉川 敏夫
—特に官僚組織と土地制度を中心として—

近世における都市周辺村落の変質過程 渡辺 清助
—江戸近郊世田谷の場合—

昭和三十年三月史学科卒業論文題目 (通教)
豪族屋敷村の研究 —江州野州郡北村の場合— 梅景 清野
鎖国の経済的要因について 玉村 十左雄

文化史的に見た和算の発達について 菊池 喜一
明治二年新川郡百姓一揆について 伊東 正一

先史時代の島田川下流地域 —地形と住民について— 末岡 忠雄
国家建設初期以前におけるイスラエル民族の宗教生活について 片岡 大作

帰化人の研究 山本 定信
近世封建社会後期に於ける農民騒動の性格に関する一考察 船津 昭雄
—美作津山藩の農民騒動を例として—

鎖国の歴史的意義に関する一考察 今井 弘
伊賀地方に於ける奈良朝寺院趾に就いての一考察

古代ギリシャの成立について 高 森 賢
近世封建社会の構造と農民生活 矢野 和泉
堀川 茂男

武蔵国比企地方に於ける弥生式文化の研究

— 武蔵国東松山市五領遺跡を中心にして —

支那数学の歴史性

資本主義の発展にともなう階級分化と自由民権運動の坐折

昭和三十年九月史学科卒業論文題目 (通教)

広見川流域の石器群についての研究 (野々の石器)

近世村落発達の歴史

敷石住居址の研究

中村藩農政史に於ける二宮尊徳の影響

伊勢志摩地方に於ける南朝勳王家の研究特に愛州について

前田 豊

越後縮市の時代的発展についての一考察

— 特に越後十日町縮を中心として —

文化年間における村松領内の農民騒動について

芸南島嶼の変遷 — 蒲刈島を中心とした —

胆沢城について

安房の沿革研究

江戸時代の駅通制度 (飛脚について)

秩父騒擾事件の研究 — 明治憲政史に於ける意義 —

徳川幕府の中核をなす機構について

播磨風土記と実栗郡

維新史における会津藩 — 特に成長戦役を中心として —

中世後期の都市と商工業について

太宰府の起源と組織について

佐竹正昭

我が国における中世の封建制度について

大川 清

米沢藩の漆政策について

郷村成立当時の農民

銅鐸の研究

大川 清

長岡 実

藤井 寛之

中山 和子

古寺 昭三

丹治 英一

田中 義人

吉ヶ別府 義則

安 沢 進

花井 文昭

岩田 晃

石和田 章

片岡 透

坪井 公式

岸田 早苗

中本 利

伊藤 順助

井上 治男

米山 幹男

名倉 康馬

大川 清

大川 清

大川 清

大川 清

大川 清

越後地方における国造の研究

宿駅「原」の研究 —特に助郷團の展開について—

明治維新前後における農民生活の実相について

福岡県(福岡藩)戦手那の場合—

関所の研究

近代初期における教育の展開

伝教大師と田川

高松城水攻の一考察

明治初年における北海道の開拓について

—特に暖内抜坑を中心とする史的考察—

南北戦争後における南部の大プランテーション農業の変革とシエ

ア、クロッパー制度について

歴史における断片的感情論

—宗教、思想、その他について—

アメリカ革命の思想的経済的背景

フランス革命における史的考察

地方における手工業の研究

吉田 和夫

渡辺 龜一

宮崎 三郎

森下 隆

亀井多喜雄

村上 寛

岸 康男

飛岡 久

大野孫一郎

中島 昭男

本蔵 久三

古江 昭二

初雁 健司

大学院日本史学専攻修士課程卒業生

本学大学院人文科学研究科日本史学専攻第二回卒業生氏名及び

卒業論文題目は次の通りである。

日清間琉球所屬問題の研究

院政権史論

用水・治水問題より観たる江戸近郊農村の一型態

—とくに三輪地としての和泉村の場合—

大学院関係行事

講演「十世紀より十三世紀迄の日本の国際関係」東京都立大学教

授 森克己博士

昭和三十年十二月三日 於大学院二〇四号室修了後質疑及び懇

談

第二回鎌倉市史関係史料展見学

昭和三十年十二月十一日(日) 於鎌倉国宝館

日本史学専攻学生及卒業生計九名、板沢教授の御指導で標記の

展覧会を見学。展示されたのは、昨年引続いて鎌倉市史編纂委

員会に於て採録された史料のうち八十二点。当日は編纂委員貫達

人氏の御説明にも預つた。なお会場には井上光貞助教以下の方

大教養学部の一行も来観されていた。去年と日こそ違ふがやはり

朝日招待国際マラソン大会当日であつたのは奇遇といえる。帰途

は小春日和の日ざしを惜んで更に足をのばし、源頼朝・大江広元

の墓に詣で、暮れやすい一日を有意義に過した。